

中世における倣古青銅器の移入と流通

—東アジアと日本の出土遺物の検討—

門 田 誠 一

はじめに

二〇〇九年六月一日より七月一七日まで、佛教大学宗教文化ミュージアムでは、特別展「海を越えた陶磁器と茶の文化―海のシルクロードの出発点『福建』」を開催した。この特別展は本学を含む三大学（明治大学・学習院大学）および二つの公立博物館（愛知県陶磁資料館・山口県立萩美術館・浦上記念館）が実行委員会を構成し、開催するという、これまでにない形態の運営方法を取り、中国・福建省博物院の全面的な協力によって、一級文物一七点を含む優秀な資料を展観することができた。

今回の展示資料のなかで、日本の中世には東アジア規模の文物の移動示す多数の資料を提示したが、これまで当該土器の貿易資料として考究の対象とされることの少なかった資料も含まれていた。その一つに倣古銅器と呼ばれる青銅器がある。これらは北宋から南宋にかけて盛んに製作され、明・元代にはその器形や文様が大きく変

化していくとされている。このような倣古銅器は、わが国では、室町時代以降の天皇家や将軍家で流行した唐物趣味の隆盛とともに珍重されたことが、主として茶道および書院の装飾に関する記録や文献などから知られていた。

これらは元来、禅宗寺院の仏前飾りに用いられた仏具として最も重要な香・花・燈の三供養に用いる三具足(燭台・香炉・花瓶)のひとつであったが、それが室町時代以降、書院の飾りに用いられるようになり、さらに座敷での喫茶のなかで、茶道具の一つとして床の間を飾る花活けとしても用いられるにいたる。ここでとりあげる倣古銅器は茶書などでは「胡銅」として、とくに珍重された。本論では、これらの倣古銅器の移入と流通、そして、その流行の基盤となった用法や書院飾りとしての意味を跡づけてみたい。

一 倣古青銅器研究の端緒としての新安沈船発見資料

中国の沈没船資料と関連して、中世における東アジアの貿易を説明する重要な資料として、韓国・新安沖から発見された沈没船(本論では歴史的事項名としては新安沈没船を使用する)をあげねばならない。これに関しては、すでに報告書も刊行され^①、その後の研究の蓄積もみている^②。ここでは簡略に現状での考古学的知見の整理と研究のまとめを行いたい。

韓国南西部は多島海の地形からなり、全羅南道の道徳島(現・曾島面所属)沖で木造の大型構造船が発見されたのは一九七六年のことであった。その後の船体の復元が進むとともに、積荷の内容も明らかになった。船体そのものは現在も韓国国立海洋遺物展示館(全羅南道)で、復元作業が行われている。船体は長さ約三〇メートル、幅

約九メートルで、排水量は約二〇〇トンと推定されている。積荷は船倉内部から発見されており、中国製陶磁器や約八〇〇万枚総量二八トンにも及ぶ銅銭、紫檀材その他の多岐にわたる品目からなる。新安沖の沈没船の年代を推定する資料としては「至治三年」（一三二三）という元の年号が記された木簡があげられる。これによって、この船の沈没に関する上限年代が、一三三三年であることがわかる。

新安沈没船の発見遺物のなかには、この船の属性や運航の実態を知るための資料がみられる。たとえば、木簡には船主を指すとみられる「綱司」の語がみられるが、これはその他の文献や文字資料では、綱首・都綱などとしてみえ、彼らの多くは中国人であることがわかつている。木簡には「東福寺公用」「東福寺公物」「東福寺・十貫公用」などの墨書があることから、東福寺造営料に関わる貿易船と考えられている。おなじく、東福寺の末寺で、博多の承天寺の塔頭である「釣寂庵」や箱崎宮を示す「筥崎」など博多の寺社に係る木簡もみられる。このことから、新安船は、たんに東福寺だけでなく、これを中心としつつも複数の主体による貿易船と考えられるにいたっている。また、人名としては、荷主と考えられる「道阿弥」「ずい忍」「いや次郎」「衛門次郎」などの僧や一般人の名がみられた。これらの木簡は新安沈没船による貿易の背景を示す資料となっている。

新安沈没船には陶磁器のほかに、乗組員の生活用具なども発見されている。そのなかには、中華鍋などの中国式の生活用具や朝鮮式の青銅製匙とともに漆碗・将棋の駒・下駄・古瀬戸などの日本製品があることから、乗組員のなかには中国人、朝鮮人、日本人がいたと考えられている。

このような資料によって、新安沈船は一四世紀前半に中国（元）の寧波から日本の博多に向かう途中で遭難し、沈没した大型交易船であると推定されている。新安沈没船は同時代の文献史料には現れないが、その一括遺物は東アジア史における重要資料と位置づけられている。

新安沈船からは倣古銅器が発見されており、その後、中国と日本で倣古銅器の出土例が一定の質量となったことよって、倣古銅器という具体的な積荷に焦点をあてて、中世における東アジアの貿易を論じることが可能となった。報告されている銅器（銀器を除く）の器種としては瓶に属する資料一三点と香炉一四点、燭台九点があり、これらは、とくに次節以降でふれる他地域出土資料との比較から、中世以降の日本で三具足と呼ばれた器種が主体となっている点が注目される。

そこで、次節以降では中国における倣古銅器の消長に関して、倣古銅器の盛行期である宋代を中心として瞥見するとともに代表的な出土例から器物としての使用法や同時代的な意味を把握する。その後、日本で出土した倣古銅器の主な類例を紹介し、中世において、三具足として用いられることの多かった倣古銅器について、絵画資料や文献記載も参照しつつ、建築や室内装飾としての意味から、その位置づけをみていきたい。

二 中国における倣古銅器の消長と出土例にみる使用法

中世以降に三具足としての用途も含めて、日本の中世遺跡から出土する倣古銅器を理解するために、まず、中国における倣古銅器の消長とその歴史的背景について瞥見しておきたい。⁴⁾

銅器や陶磁器として儒教的な儀礼に用いる礼器が盛んに用いられるようになるのは、宋代でも、とくにその後半を中心としており、その後、明・清代にも残存する。宋代は礼器としての倣古銅器の画期であり、かつ盛行期であるが、その背景としては、当時の儒教が復古的な思潮を示すことと密接に関連すると説かれることが一般的である。すなわち、『宋史』に「神宗以降、銳意稽古、礼文之事、招延儒士、折衷同異」とあるように、神宗代

以降には礼器の制度を考訂し、古制にあわないと考えられた礼器・法物を廃し、三代すなわち夏・殷・周の時代の礼器へ回帰しようとする復古的な思潮が盛んになった。この動きによって礼器に関する制度を記した著述がもたれることになる。加えて、宋代に興起した金石学ともあいまって、三代銅器の収集と器物名や文様などの研究が行われ、これらに関して著録が行われた。その代表的なものには、徽宗が王黼らに命じて、宮中等に所蔵されている古銅器を鑑定・考証し、分類させた『宣和博古図』があり、その他にも趙明誠の『金石録』や呂大臨の『考古図』その他の著録が知られる。

宋代にあつては三代礼器の収集家は数多存在したが、紙幅の関係から、北宋仁宗から神宗期にかけて、政治・詩と文学・歴史にわたる多方面で活躍し、唐宋八大家の一人に数えられる欧陽修をあげるにとどめたい。彼は金石研究の書として『集古録』を編み、また、自ら収集した銅器のなかから、先秦時代の資料について銘文の解釈と図像の模写を載せた『先秦古器図』を著した。

このように宋代には、礼器としての古器物研究が盛んになるとともに、官において三代礼器に倣った製作、すなわち倣製が大規模に行われるようになる。それとともに礼制と礼楽を司る機関としては礼制局と大晟府が置かれた。そして、宣和元年(一一一九)には地方用の礼器の規格となる範が造られる。銅製が主体であった宋代の礼器は、北宋代の末頃から汝窯・龍泉窯・定窯・耀州窯などで陶磁器によって模倣されるようになり、南宋代の末頃以降の陶磁器には礼器の影響がみられるようになる。このような銅器を中心とした倣古礼器は、実際の遺跡からも出土する。倣古銅器が出土する遺跡としては窖蔵が多く、その他では墳墓から出土する場合もある。

近年の窖蔵出土資料として、銅器とともに銀器などが多数出土したことで知られるのが彭州窖蔵出土倣古銅器である。この遺跡は一九九六年に成都市彭州で工事中に発見された四角形の窖蔵で、青銅器・陶磁器・石硯等約

七〇件以上が発見された。出土した青銅器のなかには、琮・觚・鼎・鬲などの倣古的な器形があった。

倣古銅器の実際の使用方法が知られた例として、江西・宜春窖藏出土倣古銅器があげられる。⁽⁵⁾これは江西省宜春市で工事中に発見された窖藏で、直径約一二メートル、深土一・八メートルの規模であり、窖藏の掘り込み面は現地表から約五〇センチメートル下部にあった。窖藏内部から出土した遺物は銅器二二、石器一、陶磁器四七であった。陶磁器の完形品は四一個体で、そのなかには、青磁や影青、枢府手などがあり、産地別では景德鎮・吉州窯・龍泉窯・定窯などの製品があったという。銅器としては、盆・多節壺・管耳扁壺・獸耳扁壺・雲耳扁壺・双耳三足香炉・獸脚鼎・銅獅子・三角獸香炉・龍首鷹脚付鼎・鉢形馨などの器種があった。このうち双耳三足香炉の口縁下部には「大德癸卯年郡北祈求会新造過錫器外統置香炉肆個水充供養」という線彫りの銘文があった。「大德癸卯年」は元・成宗の大德七年（一二三〇）で、この窖藏出土遺物の時期的な上限を示している。銘文にみえる「郡北」とは当時の袁州の治する所であり、今の宜春市一体を指す。報告では窖藏の発見された現地名が「神窩里」であることから、廟の存在を示すとみて、この双耳三足香炉が廟が所藏した器物であるとし、銘文中の「祈求会」のような宗教組織が資金や物資を集めて、宗教儀礼や行事を設ける際に用いた器物であるとみている。すなわち、この青銅製双耳三足香炉は、元代の一四世紀初め頃の宗教組織によって所藏され、用いられた信仰に関する器物であることが重要である。具体的な信仰内容について、この銘文のみからは不明とするほかはないが、銘文にみえる「水充供養」の語からは、仏教に関連した信仰であったと考えられ、一四世紀初頭頃の仏教系の宗教団体の信仰のなかで、倣古銅器が実際に供養に用いられていたことがわかる例として重要である。

いっぽう、新安沈船資料との相関でいえば、福建・南平大工地窖藏出土倣古銅器があげられる。⁽⁶⁾福建省中部の北よりの閩江上流にある南平市で、一九五四年に橋梁工事中に遺物が発見され、出土状況は不明であるが、銅器

を埋納した窖藏であったとみられている。一九九五年に国家文物局によって七六点すべてが再調査され、元代に属する銅器が七一点におよぶことが報告された。ただし、明代に属する銅器も四点含まれるとされ、窖藏そのものが掘削されたのは明代と考えられる。これらの倣古銅器の主な製作地は江西・宜春で発見された窖藏から出土した元代の資料と類品が多いことから、南平窖藏出土の元代倣古銅器の製作地も江西地域であると推定されている。南平市大橋工地窖藏から出土した元代の遺物のなかに見られる饕餮文管耳扁壺(図1の2)、雲雷文觚などは新安沈船発見の倣古銅器(図1の1)と類似し、後にふれるように福建省大練島沖の沈船から発見された青磁小壺の類品がやはり新安沈船から発見されていることから、新安沈船出土の倣古銅器を含めた積載品は、江西省や福建省などの各地から集荷され、当時の明州すなわち寧波から出航したことがわかる。そして、次章でみるように倣古銅器は、日本各地の中世遺跡からの出土が知られており、これまでの指摘があるように日本向けの器物であったと推定される。^⑦

三 中世遺跡出土の倣古銅製と銅製三具足

中世の遺跡からは中国から将来された倣古銅器を含む銅製三具足が一揃いで、あるいはそのうちの一部の器種が出土することが知られている。詳細は久保智康氏の研究にゆずるが、国内の出土例のなかで詳細な報告のある類例を瞥見し、中世における倣古銅器の出土傾向を把握したい。

(1) 伊達八幡館遺跡(新潟県十日町市・図2の1～3)

伊達八幡館跡は、一九八七年に圃場整備事業(伊達地区)に伴い、調査された中世の居館跡である。調査では、掘立柱建物跡四九棟等が検出されており、これらを取り囲む空堀から、銅製仏具である花瓶・燭台・錫杖など五点が出土した。花瓶は倣古銅器であり、報告書では、そのうちの一点は新安沈船資料との比較から、輸入品と推定している。居館の年代については、一五世紀前半に成立し、一六世紀代まで継続していたとみられている。この居館の造営主体については、文献史料等に記載がなく、特定はできないが、輸入陶磁器や稀少な銅製仏具の所有によって、当該地域において、確固とした経済的基盤もった勢力と推定されている。この遺跡では白磁・青磁・青華白磁・中国産天目碗・茶磨などの出土を勘案して、錫杖を含んではいるが、銅製仏具も茶道具と位置づけている。

(2) 白山橋遺跡(石川県穴水町・図2の4～7)

白山橋遺跡を含む西川島遺跡群は中世の多様な祭祀遺構が検出されたことで知られる。西川島遺跡群は能登半島の中ほどに位置し、七尾湾の北側を望む穴水町に属する複数の遺跡からなる。そのなかで白山橋遺跡では平面四角形の石組みの遺構(34号配石遺構)から青銅製の香炉・花瓶・燭台のいわゆる三具足の一式が出土した。これらの年代は伴出した土師器から、一五世紀中葉から後半頃とされている。

周辺では同様の配石墓が六〇基ほど検出されていることから、この遺構も墓と考えられており、三具足が墓に埋納された稀少な例となっている。

(3) 大光寺裏山遺跡(埼玉県上里町・図2の9)

大光寺裏遺跡は神流川右岸の自然堤防上に位置する。発掘調査によって、中世の溝・石列・土壙などが検出された。これらの遺構はほぼ一六世紀代に属すると報告されている。

出土遺物のなかには古瀬戸瓶子・青銅製香炉・青磁碗・天目碗などとともに青銅製の香炉・座金・縁飾り・分銅状製品が出土した。遺構面の上から出土したとされているが、遺物の周囲から埋納のための掘込が確認されていると報じられていることから、これらの遺物は一括埋納されたことがわかる。青銅製香炉は三つの足がつく鼎形の香炉で、足には獣面が表現され、胴部には三段の雷文が巡っており、これらの特徴から一四世紀前半頃のものとは推定されている。瀬戸瓶子や青銅製香炉の年代は一四世紀と報告されているが、周辺の遺構は一六世紀に下るとみられ、報告書ではその時点で伝世品が埋納された可能性が示唆されている。大光寺そのものは一三世紀に創建されたという伝承をもつが、天正一〇年(一五八二)に焼失しており、ここに遺構と遺物の下限年代が求められる。

(4) 本村遺跡(埼玉県ふじみ野市・図2の8)

本村遺跡は縄文時代から中世にいたる複合遺跡で、中世の遺構としては井戸跡、溝、土壙墓、土塁の一部が確認されている。このうち井戸(三号井戸)の底部から青銅製花瓶が出土した。伴出遺物としては青磁碗・瓦・銭貨などがある。この井戸の年代については、青磁碗から一五〜一六世紀頃とみられている。中世の集落遺跡の井戸から出土した青銅製花瓶の稀少な例となっている。

(5) 栄町遺跡(東京都日野市・図3の1～3)

日野台地の北側に広がる多摩川の沖積地に立地する遺跡で、発掘調査によって古代から近世にいたる複合遺跡であることが判明した。中世の遺構としては、掘立柱建物跡二棟、五九基の地下式墳、五九三基の土壙などが検出された。そのうちL地区第五五土坑は南北方向の残存長径六一センチメートル、東西方向の短径五五センチメートル、深さ二八センチメートルで、青銅製花瓶・香炉・燭台のいわゆる三具足が出土した。土壙の底部中央に三種の青銅器が固まって出土していることと覆土の状態から人為的に埋納されたものと報告されている。三具足の所屬時期について、報告書では中世末とし、本遺跡そのものの中心年代が一四～五世紀にあると結論づけている。報告書では本遺跡からは石臼が多数出土していることを傍証として、出土した三具足が「座敷の荘厳に用いられた」可能性を示唆している。

(6) 肥田城遺跡(滋賀県彦根市)

肥田城は六角氏の家臣であった高野瀬隆重が大永年間(一五二一～二八年)に築かれた城という所伝があり、『近江愛郡志』などでは、永祿三年(一五六〇)には六角氏による「肥田城の水攻め」が行われた場所とされる。発掘調査が行われた結果、一六世紀代に該当する時期の城館を形成する複数の屋敷地や遺物が発見された。出土遺物としては、信楽焼・丹波焼・越前焼・土師器などの陶器や土器の他に、瓦質の香炉・花瓶・風炉などの茶道具とともに銅製飲食器(仏飯器)などの仏具六点が出土したと現地説明会資料で報じられている。これらの出土遺物によって、屋敷地の一つに仏教に関係する施設が存在したと推定され、現時点での報告では寺院や持仏堂の存在を

具体的に裏付ける資料と位置づけられている。ただし、肥田城址出土の銅器は三具足を構成するが、すべて無文であり、明末の中国製品か、または有文の倣古銅器から変化した国産品である可能性も考えられる。

(7) 西万木遺跡出土倣古銅器(滋賀県高島市・図2の10)

西万木遺跡は琵琶湖に流入する安曇川の扇状地の末端部に立地する。発掘調査では、室町時代前半(一四世紀後半から一五世紀)を中心とする時期の屋敷跡と考えられる様々な遺構が検出された。遺構には区画溝跡・掘立柱建物跡・土坑などが検出された。この区画溝は北に向かった平面が逆コの字を呈し、幅約二メートルで、南北の総延長約四〇メートル、深さは約三〇〜六〇センチメートルで、屋敷地の四周を巡る区画溝であると判断された。この区画溝から倣古銅器一点が出土している。この遺物は双耳壺と呼ばれる器種で、底部は本来の青銅製の円板ではなく、木製の円板をはめ込んで漆によって固定されており、補修の痕跡が確認された。表面にはところどころに黒色の漆が認められ、本来は漆が塗布されていたとみられる。本例の参考資料として、中国江西省宜春市市法院窖藏遺跡出土銅器群中に類似の資料があると報告されている。

(8) 浄光寺蓮華院(熊本県玉名市・図3の5〜6)

浄光寺蓮華院は平安時代後期頃に創建されたとする寺伝があった。一二九二年の敷地開墾時に本堂跡の地下より鶴亀燭台三点、小仏像二体、金銅香爐(身部分)一点などの荘厳具が発見された。その後、一九六四年の本堂基壇の造成工事中にも、金銅仏頭一点と勾玉一点、瓦器盤が発見された。これらの遺物は本堂建立にあたって、埋納された鎮壇具と考えられている。これらの資料は鎌倉時代の遺物と報告されている。ただし、他の類例等から

みて、後の時期に属す遺物である可能性も考えられる。

この他、正式な報告が出ていない場合や報道の段階の資料としても類例が知られている、一九八四年に調査された片桐塚群遺跡(新潟県見附市)の東福寺跡から青銅製管耳瓶が出土している(図3の4)。ここでは寺院関係の遺構は検出されなかったが、中世に属する中国製磁器や日本の陶磁器とともに、時期が確定できないが、銅碗破片などが出土している。青銅製管耳瓶は報告では包含層出土と読み取れるが、詳細な出土位置や状況および層位に関する報告はない。⁽¹⁶⁾ 青銅製管耳瓶そのものはその後の再調査で確認されており、元代の中国で製作されたものとみられる。類品は十日町市の伊達八幡館跡などで出土しており、現状では全国で三例が知られていると報じられている。⁽¹⁷⁾

寄谷遺跡(三重県松阪市)⁽¹⁸⁾では発掘調査によって、一六世紀を中心とした時期の掘立柱建物跡・井戸・石組溝・溜池状遺構などが検出された。そのなかで井戸(SE4)の底部から、青銅製花瓶として用いられる青銅製双耳長頸瓶が出土した。この井戸からはほかに柿経・曲物・植物種子などが出土した。ただし、青銅製花瓶については、時期が下る可能性も示唆されている。この地点は北畠氏と関係した養徳寺という寺院が存在したという伝承があり、柿経や青銅製花瓶の出土から、寺院の存在が推定されている。これら以外にも、丸子館跡(宮城県北上市)では一次調査の報告書の中で、二次調査で青銅製両耳瓶が出土した事実が報じられている。⁽¹⁹⁾

ここにあげた主要な出土例からみても、倣古銅器は器種的には花瓶・燭台・香炉を主体とし、时期的には一五～六世紀を中心として、地域としては東北から九州にかけて広く用いられていたことが推定される。

四 倣古銅器の移入と流通

中国とくに華南地域の窖藏等から南宋から元代を中心とした倣古銅器の出土することは、この時期の倣古銅器の流行を示すものにほかならない。そして、倣古銅器はたんに美術品あるいは嗜好品としての価値だけではないことは江西・宜春窖藏出土の銘文資料によって知られる、すなわち、この例では廟における祭祀に用いられていたものであり、当該時期の倣古銅器の中国における使用法を具体的に示している。

いっぽう、東アジアにおける貿易品としての倣古銅器の流通について、参照されるのは福建省南平市大工地出土遺物である。新安沈没船出土資料中の青銅管耳瓶や青銅陽刻饕餮文管耳瓶の類品が、ここから出土した元代の遺物のなかに見られる(饕餮文管耳銅扁壺、雲雷文觚)。

いっぽう、福建省南平市大橋工地と新安沈没船の倣古銅器の関連を考えるうえで、とりわけ注目されるのは、平潭・大練島の沖から引き揚げられた元代の沈没船の発見遺物のなかの青釉双系小罐(図1の4)で、新安沈没船資料中の青磁陽刻龍文双耳小壺・青磁双耳小壺(図1の3)と器形および文様が酷似する。

これによって、新安沈没船の積み荷の品目や種類に、中国本土での流行や嗜好が影響を及ぼしていたことを想定する必要がある。この種の器形について、平潭・大練島沖沈船の報告文ではインドネシアなどに分布することが指摘されているが、出土遺物ないしは沈船資料ではなく、収集品であるため、必ずしも適当な判断とはいえない。いっぽう新安沈船資料は大量の陶磁器や銭貨などとともに寧波から出航し、その積荷には東福寺関係の木簡がみえることから日本向けの貿易品があったことは確実とされている。

新安沈船の史的位置づけについては、近年の榎本渉氏の研究が参考になる。⁽²⁰⁾すなわち、慶元（現在の寧波）で最初の倭寇が起ったのは至大二年（一二三〇）のこととされ、その後、泰定年間（一二三二―三三）の倭寇に際して、一時、倭船の慶元への入港が一時禁止された可能性はあるものの、全体としては倭人に対する警戒を高めながらも、市舶吏卒の不正を防ぎ、軍備を強化することで倭寇の再発は防止するという政策をとっていたと考えられている。泰定二年（一二三二）には禅僧である中巖円月らが乗りこみ、建長寺造営費用の拠出を目的とする建長寺船が発遣されている。「至治三年」（一二三三）を上限とする新安沈船は、この至大から泰定年間にかけての倭寇勃発の時期にあたり、このような歴史的状况からも新安沈船の一括資料は、東アジア海域の貿易と国際情勢の観点から重要な時期の資料となっている。一四世紀前半にはさきの建長寺船のほかに、鎌倉大仏造営料に関わる関東大仏船や天竜寺造営料を拠出する天竜寺船などが史料から知られており、新安沈没船はこれらの「寺社造営料唐船」の実態を再考するための基本的な知見を提供している。

いっぽう、新安沈没船の目的地であり、中世の国際貿易都市であった博多遺跡群では、その実態を示す遺跡や遺物が蓄積している。たとえば、「綱」字や中国人名など記された木簡や墨書土器があり、これらによって当時の博多に中国人商人が集住していたことが明らかにされている。⁽²¹⁾また、博多遺跡群では、元のフビライによって制定された文字であるパスバ文字の記された銅銭（大元通宝）や銅印などが出土しており、元との関係を具体的に示している。これらのように新安沈没船とその歴史的背景を知るための資料は、出土遺物の面でも蓄積されつつある。

このように新安沈船発見資料によって、日本への移入された貿易品の実態が明らかになってきた。そして、さらに実際の考古学資料として、日本各地の遺跡から、倣古銅器が出土したことにより、これらを含む貿易品の流

通の実態があとづけられることとなった。とくに、倣古銅器が使用された状況と方法については、実物資料としての出土資料と文字資料である文献、絵巻物などの絵画資料から検討できる。すなわち稀少ながらも西万木遺跡や伊達八万館遺跡などの実際の出土資料から、一四世紀代以降には地方豪族の居館などにおいて、用いられていたことが判明した。

五 倣古銅器の用法とその変容

このようにして日本にもたらされた倣古銅器はいうまでもなく「唐物」と呼ばれた貿易品に含まれ、茶事のみならず、いわゆる三具足として仏事に用いられた。

三具足の起源については『仁王般若波羅蜜經』『無量壽經』などを根拠とするとされていたが、前者は偽經すなわち中国で編纂された經典であり、後者にも本来的な經文には三具足に関する記載がないことが指摘されている^②。大正大藏經を検索しても、管見では仏具としての三具足を指す用法を知るにいたらなかった。このような点から、三具足の起源や用法を仏典の内容に求めることは難しい。

また、日本における三具足の初現については、これまで『望月仏教大辞典』にみるように「支那宋代の禪家にありて、爐・瓶・燭台の三器を仏祖の前に用いたること勅修清規・大鑑清規等に見えたれば室町時代に禪宗の興隆と共に此種の仏具広く用いらるに至れるがごとし」とされるのが典型的な見解であった。同じく、日本における三具足の展開については、「鎌倉末期頃より漸次行はれたるものにして、即ち禪家の風を受けたるものなるが如し」とし、また「足利時代に及び、華道の勃興と共に、之を移して書院の床飾りとなし、遂に五具足、七莊

等の法あるに至れり」とある見解がとられていた。すなわち、ここでは三具足は鎌倉時代末期に禪宗を通して、日本に移入され、室町時代に華道の勃興とともに書院などの床飾りとして用いられ、やがて仏具として広く一般に用いられる、という受容と流行の過程が説明されている。

しかしながら、考古資料からは、室町時代に書院などに置かれた室内装飾品として用いられた三具足のその後の展開は仏具としてのみならず、地方武士の居館などにおいても、広い地域で用いられていたことがわかっており、これについては後に考察したい。

そもそも三具足としての使用に関しては、史・資料上の初見は文献そのものの記録よりもはやく絵巻物から知ることができる。すなわち、現在知られるなかで、時期的に最もさかのぼる絵画資料としての三具足は『慕婦絵詞』にみえることが夙に指摘されている。⁽²⁴⁾すなわち、この絵巻では本願寺第五世の覚如が、観応二年（一二五二）に不例にて医師を招いた際に、枕元には阿弥陀仏の画像を掛け、その前に卓を置き、その上に燭台・花瓶・香炉を置いている場合があり、これが文献・絵画などみえる三具足の初見とされる⁽²⁵⁾（図1の5）。この場合、阿弥陀仏の画像はたんなる画幅としてではなく、彫刻の阿弥陀像に代わるものとして信仰の対象であったことは自明である。

このような仏具・仏器としての用法に留まらず『慕婦絵詞』には、多様な高炉や花瓶の使用法が認められることが先学によって指摘されている。⁽²⁶⁾巻五では歌会で想をめぐらす人々の座す部屋奥の押板に掛けられた三幅の画巻、すなわち中央の歌聖・柿本人麿像の左右に松竹梅の墨絵の前に香炉と対の花瓶が置かれている（図1の7）。ここでは燭台はみられないが、押板に掛けられた画幅の前の装飾品の用法が知られる。

巻八では覚如が身辺の世話に使っていた光養という少年が、文机の前に短冊を持って座り、傍らに立つ覚如の前の机の上には蜀台と花瓶と香炉の三具足が置かれている（図1の6）。ここでは三具足の背後には仏画も画幅も

見当たらず、仏像を荘厳したり、あるいは画幅を装飾するためではなく、歌作を行う部屋の装飾として用いられている。この場面の特徴は、三具足を使った仏前の供華という形式にこだわらず、歌作の場に臨んで、歌聖とされた柿本人麻呂の画幅の前に三具足が置かれていることである。これによって、『慕帰絵詞』では三具足やそれを構成する香炉や燭台が、本来の仏具としての用法とともに、画幅の前に置かれる装飾としての三具足が表されていることが知られる。

文献記載としてはいわゆる『御飾書』の系統の座敷飾りに関する規式では三具足について、しばしばふれられており、たとえば、編纂の時代は不明ながら、一六世紀後半頃には現在のような形態の書となったとされる『君台観左右帳記』に「押板ハ三間二間一間半。各三幅一对。五幅カクヤウ同ジ物タルベク候。三具足。又同前掛り候。絵ノ間同ジ物タルベク候。(後略)」とみえる⁽²⁸⁾。また、大永三年(一五二三)の奥書があり、万治元年に出版された『御飾書』(『東山殿御飾書』)にも「飾次第」として「一、おしいたの三幅一对・五幅一对かかる時は、かならず三具足おくべし」とあり、これらによって床の間出現以前の押板に置かれた三具足の様子が知られる。

このような書院や茶室の装飾としての三具足の材質としては、青磁に代表される陶磁器が主流であったとみられ、新安沈船発見資料のなかには実際に青磁の香炉・燭台および花瓶としての梅瓶が存在し、これらが貿易で日本に移入された後は実際に三具足として使用された場合があったと考えられる。

いっぽう、陶磁器ではない、銅製の三具足については「胡銅」として文献にみえる。室町時代の語彙が知られる『下学集』に「古銅花瓶、コトウノクワヒン」とみえるほか、『御飾書』にも「三具足は胡銅にて香匙の台ばかり茶碗のものにてもくるしからず」とあり、すなわち、三具足は胡銅を優先することが記されているのをはじめとして、少なからぬ言及がある。『君台観左右帳記』にも「胡銅之物」として、「これは何とも可申事候はず候。公方

様御物ニハ三具足、花瓶などに名物御座候へとも、つねの世上に今ある物共にて候間、不及申候。和漢の見やうは其物によりて口伝ならては難申候。紋のある物はやすく候。無紋の物大事に候歟」とあり、胡銅の三具足のうち、無紋のものを珍重すると述べられている。『満濟准后日記』には永享二年（一四三〇）三月十六日の記録として、次の日に行われる金剛輪院の花見のために、室町殿会所の唐物多数を同朋衆に持たせて、新造の会所の飾り付けをさせている。実際の記述では自室町殿会所置物。御絵七幅。小盆三枚。胡銅三具足。同香合。文梅。花瓶一对（後略）とあり、「置物」としてみえる器物や什物のなかに「胡銅三具足」がみえる³²。このような「胡銅」「古銅」の器物は贈答や報奨にも用いられた。たとえば『看聞日記』応永三年（一四一六）八月二一日条には、伏見宮栄仁親王が自身の病の治療にあたつた医師昌耆に胡銅瓶等を賜い、その療治の労を慰藉した、という記事がみえる³³。これらの記載から、中国より渡来した三具足としての倣古銅器は「胡銅」または「古銅」と呼ばれて室町時代には珍重されたことが知られる。なお、『君台観左右帳記』にはさきにふれた胡銅の無紋の三具足を珍重するという記述に加えて、「繪胡銅の物大事にて候。からかねの色をよく見わけ。文のさしやうにて、心得有べし。無文の物大事にて候」とみえることを参考にすると、三具足などの胡銅のなかでも、中世の終わりころには、無文の製品が重視されていたと考えられる。これを実際の出土例にて敷衍してみると、一六世紀頃とされる肥田城遺跡出土例のような無文の例があることから、実際の嗜好の変化の一端が、この記述に現れている可能性がある。いずれにしろ、このような室内装飾としての三具足の流行は、書院を中心とした建築様式の変化、とりわけ押板の盛行と関連していると考えられる。押板とは室内に設えて物を飾る台であり、当初は置き押板であつたが、次第に造り付けへと変わつていった。押板は床の間の前身で、床の間に比して、一般に幅は広く奥行は狭い。『慕帰絵詞』にふれたところのみたように、押板に三幅対の画卷を掛けて、その前に三具足が置かれており、地方の

中世居館址から出土した倣古銅器を含む三具足についても、居館内の書院や居室において、同様の用いられ方がなされていたことを示す具体的資料と評価できる。

まとめ

最後に本論の要旨を整理することによって、結語にかえたい。

まず、近年、中国や韓国において沈船資料や窖藏出土品として知られる倣古銅器の主な例をあげて、その事実関係と史的背景とを述べた。

次に、とくに沈船資料などで倣古銅器の伴出遺物である陶磁器のなかには、青釉双系小罐のように福建省平潭・大練島沖と新安沈船のように同一の器種があることから、新安出土の倣古銅器の系譜が福建を主とした華南沿海地域にあることを推定した。

そして、倣古銅器の宋・元代における流行の中心も、江西省や福建省の華南地域を主とすることを窖藏出土資料等によって示した。それとともに中国華南地域における倣古銅器の実際の使用方法については、廟などで祭器として使用される例があることを実態として示した。

さらに、近年、明らかになった日本における倣古銅器の出土例をあげ、日本国内における倣古銅器の流通が地方の豪族などに及んでいることにふれた。

また、中世における倣古銅器の使用状況と使用方法については、出土資料と文献史料、絵画資料をもとに検討した。その結果、一四世紀頃までは茶事などに用いられていた倣古銅器が、一四世紀頃にはいわゆる三具足とさ

れ、茶事にも仏具としても使用されるようになり、日本における倣古銅器使用の変容が認められる。

以上のような本論での行論に基づいて、現今の資料状況では、あくまでも図式的ではあるが、次のような東アジアにおける倣古銅器の流通が史的に復原される。すなわち、中国南方での倣古銅器の出土資料によって、それらに対する窖藏による備蓄や廟における実際の使用と盛行があとづけられる。そのような倣古銅器が集荷されて、寧波を主とした貿易港から日本を対象とした貿易船で積み出され、博多を主とした日本の港で荷揚げされた後に、それらが地方居館などへ交易され、書院茶室などでの使用される、という東アジアにおける倣古銅器の流通経路が提示できる。そして、倣古銅器の日本国内での使用方法に関して、出土資料と『慕婦絵詞』を中心とした絵巻物および文献史料などの絵画資料から勘案すると、三具足に典型的に現れるように、一四世紀頃までは、仏具として認識されていたが、一四世紀前半頃からは押板に掛けた画幅の前に室内装飾として茶室などで茶事に用いられるようになり、以後はいわゆる三具足として、茶事と仏事に用いられるようになったと推定される。

ここまで論じてきたように倣古銅器の中国・日本での出土資料の吟味を通じて、一四世紀を中心とした東アジアの貿易の実際と輸入品の日本国内における流通の様相およびそれらの使用環境や使用方法の変容について、いずれもその一端ではあるにしろ、明らかにしえた。

このような東アジアを舞台とした倣古銅器の貿易と流通は、たんに一品目にとどまらず、新安沈船における主要な積荷であることによって、日元貿易における主要な輸入品である銭貨や陶磁器についても、貿易品としての個別の意味あいをさらに考究することによって、これらの品々の集荷および流通経路を検討する際の参考となるう。

〈補注〉

- (1) 韓国文化公報部文化財管理局編『新安海底遺物…資料篇』同和出版社、一九八三年(韓国文および日本文) 韓国文化財庁・国立海洋文化展示館編『新安』1~3、韓国文化財庁、二〇〇六年*
- (2) 谷正『新安海底発見の木簡について』正・続『九州文化史研究所紀要』三〇、三一、一九八五、一九八六年
岡内三眞『新安沈没船を通じてみた東アジアの貿易』『朝鮮史研究会論文集』二三、一九八六年
国立歴史民俗博物館編『東アジア中世海道…海商・港・沈没船』毎日新聞社、二〇〇五年
木村淳『新安海底遺跡を取り巻く最新の研究状況—韓国での国際学術シンポジウムに参加して—』『歴史学研究』八三五、二〇〇七年
- (3) 金沢陽『新安海底遺跡と十四世紀アジアの海上交易』『陶説』六四七、二〇〇七年
村井章介『寺社造営料唐船を見直す—貿易・文化交流・沈没船—』歴史学研究会編『港町と海域世界』シリーズ港町の世界史①、青木書店、二〇〇五年
- (4) 榎本渉『東アジア海域と日中交流—九〜一四世紀』吉川弘文館、二〇〇七年
倣古銅器の変遷と歴史的意味については下記文献を参照した。
王霞『宋明清仿制三代青銅礼器原因考』『中原文物』二〇〇五—五*
- (5) 陳芳妹『追三代於鼎彝之間—宋代の「考古」から「玩古」への展開について—』『美術研究』三九一、二〇〇二年、『故宮學術季刊』二三—一* 原載
- (6) 徐巖『宋人对古代器物研究』『南京芸術学院学報』美術与设计版二〇〇六—四*
- (7) 謝志杰・王虹光『江西宜春市元代窖藏清理簡報』『南方文物』一九九二—二*
- (8) 黄漢杰・曾偉希『福建南平窖藏銅器』『南方文物』一九九八—二*
- (9) 久保智康『新安沈船に積載された金属工芸品—その性格と新安船の回航性をめぐって—』九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会編『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室50周年記念論文集—』九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会、二〇〇八年

- (8) 久保智康「新安沈船に積載された金属工芸品―その性格と新安船の回航性をめぐって―」(前掲)
- (9) 十日町市教育委員会編『伊達八幡館跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会、二〇〇五年
- (10) 穴水町教育委員会編『西川島1―穴水盆地における中世遺跡群の調査』、穴水町、一九八〇年
- (11) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編『高崎線神流川橋梁関係埋蔵文化財発掘調査報告…大光寺裏』埼玉県埋蔵文化財調査事業団、一九八五年
- (12) 埼玉県大井町遺跡調査会編『本村遺跡―大井町立東原小学校新グラウンド造成に伴う発掘調査報告書 第8地点』埼玉県大井町遺跡調査会、一九九三年
- (13) 日野市栄町遺跡調査団編『日野市栄町遺跡…都営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』東京都住宅局、一九九五
- (14) 高島市教育委員会・滋賀県文化財保護協会編『西万木遺跡現地説明会資料』二〇〇八年一月二日
- (15) 玉名市教育委員会編『浄光寺蓮華院跡出土品』玉名市教育委員会・玉名市文化財保護委員会、一九八一年
- (16) 見附市教育委員会編『片桐塚群遺跡Ⅱ発掘調査報告書』見附市教育委員会、一九八六年
- (17) 『新潟日報』二〇〇八年(平成二〇年)十一月六日(木)付朝刊
- (18) 三重県教育委員会編『近畿自動車道(久居)勢和間埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県教育委員会、一九八七年
- (19) 北上市教育委員会編『九子館跡』北上市教育委員会、二〇〇四年
- (20) 榎本渉『東アジア海域と日中交流…九一四世紀』吉川弘文館、二〇〇七年
- (21) 大庭康時「博多綱首の時代―考古資料から見た住蕃貿易と博多―」『歴史学研究』七五六、二〇〇一年
- (22) 望月信了編『望月仏教大辞典』世界聖典刊行協会、一九五四〜七年
- (23) 奈良弘元「仏具「三具足」をめぐって」『日本佛教学会年報』六七、二〇〇二年
- (24) 林屋辰三郎著・村井康彦図版解説『図録茶道史』淡交社、一九八〇年(初版は一九六二年)図一五四、一九九の解説。
- (25) 奈良弘元「仏具「三具足」をめぐって」(前掲)

- (26) 林屋辰三郎著・村井康彦図版解説『図録茶道史』淡交社、一九八〇年(初版は一九六二年)図一五四、一『君台観左右帳記』
九九の解説。
- (27) 谷晃「『君台観左右帳記』の成立に関する一考察」『野村美術館紀要』三、一九九四年
- (28) 『君台観左右帳記』(日本思想大系本)
- (29) 『御飾記』(群書類従第19輯遊戯部および茶道古典全集第二卷)
- (30) 亀井孝校訂『下學集・元和本』岩波書店、一九四四年
- (31) 『御飾記』(群書類従第19輯遊戯部および茶道古典全集第二卷)
- (32) 『満濟准后日記』(続群書類従)
- (33) 『看聞日記』(大日本史料七編)

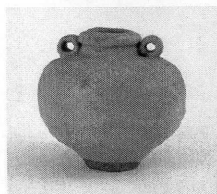
(末尾に*を付したものは中国語文献)



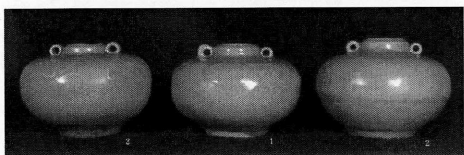
1 新安沈船倣古銅器管耳瓶



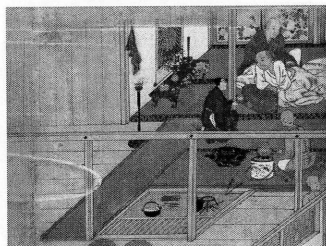
2 福建省南平市区大桥工地出土倣古銅器管耳瓶



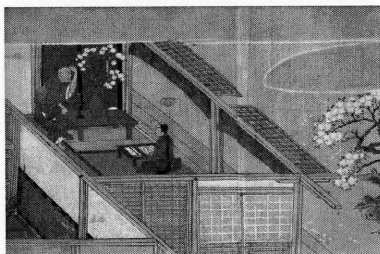
3 新安沈船青磁小壺



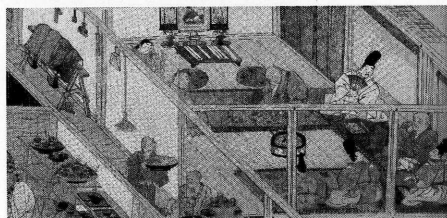
4 福建省平潭大練島沖



5 『慕婦絵』 卷8



6 慕婦絵』 卷8



7 『慕婦絵』 卷5

図1 遺跡出土倣古銅器関連資料

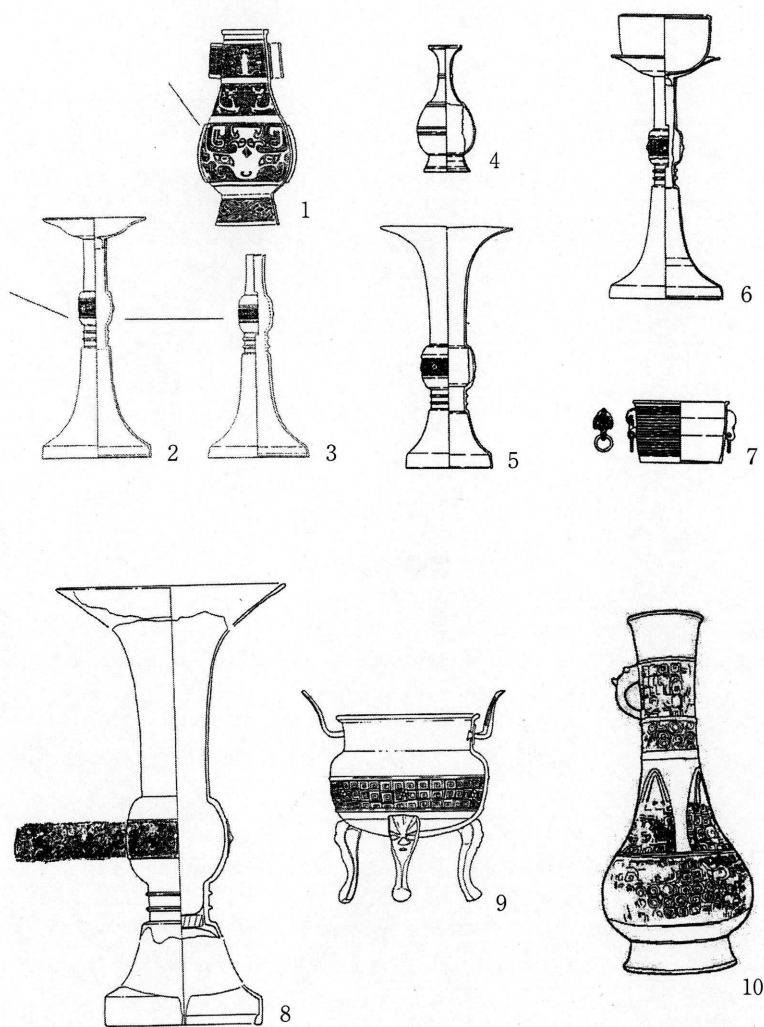


図2 中世遺跡出土倣古銅器(1)

1~3 伊達八幡館 4~7 西川島・白山橋 8 本村 9 大光寺裏
10 西万木〔写真からの書き起こし〕(縮尺1/4)

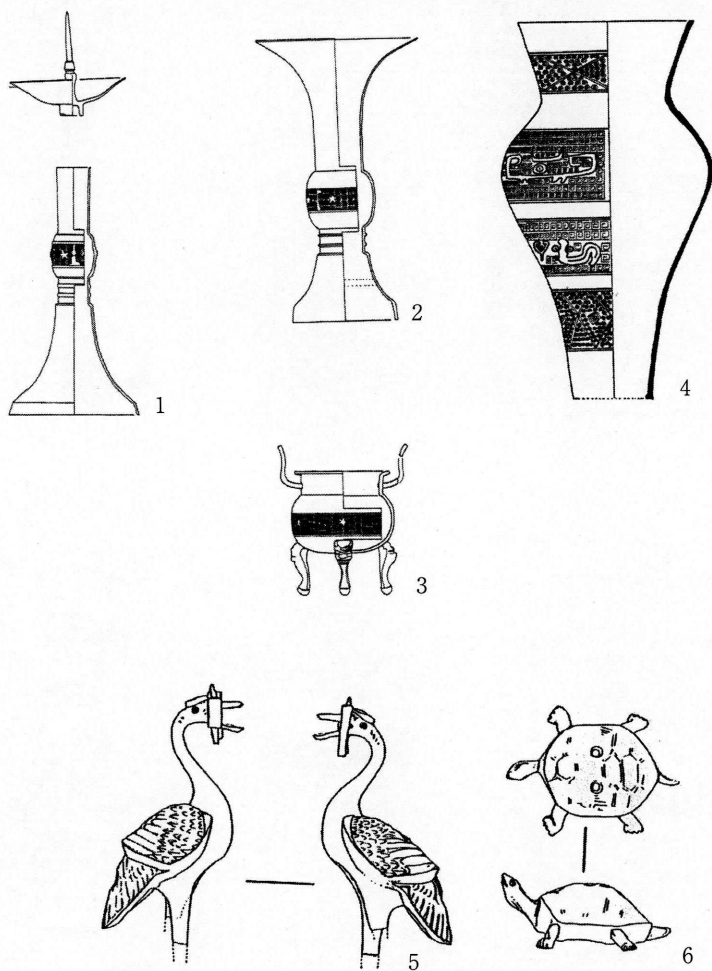


図3 中世遺跡出土倣古銅器(2)
 1~3 栄町 4 片桐塚(復原前) 5, 6 浄光寺蓮華院 (縮尺1/4)